

## ていねいな暮らしのあつたころ

## 佐野二彦の撮った伊深の里山



「割り木を束ねる」(昭和39年12月12日撮影)

## 「たき物」

ガスや電気器具が普及するまでは、家庭の燃料は山の木などが中心でした。

農家では、冬の農閑期あるいは田植えが終わったころに、「たき物」を山へ取りに行きました。

割り木は束ね方に決まりがあり、六尺三寸(約一九〇センチ)の針金を二回りさせて束ねました。その昔は縄や竹を用いました。また、たきつけの



「たき物を門に積む」(昭和38年3月14日撮影)

ための松の落ち葉を集める「マツゴかき」や「あえ切り」といってシバを刈ることも行われました。「マツゴ」や「あえ」を集めることは、女性や子ども、年配者の仕事でした。「マツゴ」は熊手を使ってかき集め、竹かごに入れるか、縄で丸く縛りまとめました。「あえ」の束ね方は家ごとにやり方があったようで、嫁に來るとその家の祖父に、教えてもらうこともありました。

割り木は軒下に、「マツゴ」や「あえ」は屋根裏など乾燥した場所で貯蔵しました。